

# 北京における言語評価

宮本 大輔

## はじめに

本論文は、北京、天津、上海、杭州を研究対象地とした「中国人の言語評価」という研究課題の一環であり、また筆者の博士論文の一部でもある。ここでは、北京人大学生を例として論じる。

現在、中国には10の地方方言 (regional dialect) と数多くの局地方言 (local dialect)、そして少数民族言語が存在している。各地方方言の話者同士では勿論のこと、時には、同じ地方方言の下位カテゴリーに属する各局地方言の話者同士でさえも、互いに意志を疎通させることが難しい。このような状態にある中国において、中国全土で通用する普通話<sup>(1)</sup>を普及させることは、中国の人々がコミュニケーションの円滑化を図る上でも、また科学技術の普及を進める上でも、非常に大きな意義を持っている。

ここで、中国に先んじて共通語を構築した日本の状況を概観する。共通語は今日、北海道から沖縄まで日本全国で使用されている。井上 (2007) によると、日本社会における方言の位置づけの歴史的変遷は次のように類型化できる (表1)。

このように、方言の社会的類型が変化するに従って、方言に対する価値的評価もマイナスからプラスへと変化していることが分かる。

では、中国における方言に対する価値評価はどのようなのだろうか。本研究はそれを明らかにすることを

主眼としている。

本研究では主に以下に示した問題を明らかにしていく。

(1) 北京人大学生の心中に存在する普通話及び地方方言に対するステレオタイプのイメージはどのようなものか。

(2) 北京人大学生が日常生活において普通話と母方言をどのようにシフトするのか。

これらの問題を究明することにより、対象地域の大学生が各方言に対してどのようなイメージを有するのかを探るとともに、北京における普通話と方言の共存の実態を解明する。また、北京人大学生が各方言に対して抱くイメージのステレオタイプが形成された要因について、社会的、文化的、歴史的側面からいくつかの仮説を示したい。

## I 先行研究

### (1) 言語意識及び言語評価に関する研究

中国では、香港、シンガポール、少数民族地域といった特殊な言語状況をもつ地域及び留学生に関する言語意識研究は行われているが、中国国内の地方方言に対する言語意識及び言語評価研究は始まったばかりである。

陳 (1990) は、中国浙江省紹興市において、普通話の社会分布とその発展傾向を探ることを目的としたアンケート及び現地インタビュー調査を実施した。調査対象は、教育機関の教員・学生、一部の党幹部、工場労働者、病院・郵便局・銀行の職員及びホテルや商店の管理人員・職員、そして露店商など400余名である。最終的に得た254部の

表1 方言の社会的類型<sup>(2)</sup>

	類型	時代名	時代	方言への価値評価	使用能力
前史1	方言蔑視	京言葉の時代	～江戸前期	独立	方言優位
前史2	東西対立	江戸語の時代	江戸後期	独立	方言優位
第1類型	方言撲滅	標準語の時代	明治～戦前	マイナス	方言優位
第2類型	方言記述	共通語の時代	戦後	中立	両立
第3類型	方言娯楽	東京語の時代	戦後～平成	プラス	共通語優位

有効回答から、紹興市における普通話の発展傾向を分析し、その発展プロセスを以下のように図式化している。この研究から、紹興市における普通話と紹興方言の使用傾向とその発展傾向の一端をかいま見ることができた。

A（紹興方言モノリンガル）→B（消極型バイリンガル）→C（適応型バイリンガル）→D（積極型バイリンガル）→E（普通話モノリンガル）<sup>(3)</sup>

また、高・蘇・周（1998）は、香港、北京及び広州の大学生を対象に、12組の評価項目を設定し、広東語、英語、普通話、広東訛りの普通話、それぞれの話者に同じ文章を朗読させるという調査方法を用いて、言語評価調査を実施した。具体的な評価項目は、「親切である—冷たい」、「学歴が高い—学歴が低い」、「信頼できる—信頼できない」、「開放的—閉鎖的」、「平等的—差別的」、「理想主義—現実主義」、「給料が高い—給料が安い」、「頭が良い—素直である」、「尊敬できる—尊敬できない」、「お金があれば株を買う—お金があれば貯金する」、「礼儀正しい—豪快である」、「裕福である—裕福ではない」である。

高氏らはその結果を次のようにまとめている。(1) 香港のインフォーマントの普通話に対する評価は全体的に大陸のインフォーマントのものと同様であり、特に普通話を持つ社会的地位に関しては肯定的である。(2) 香港のインフォーマントの英語に対する評価は大陸より低く、広東訛りの普通話に対する評価は大陸より高い。(3) 返還前の香港の大学生は、英語に対しては否定的な態度、普通話に対しては肯定的な態度、そして母方言である広東語に対しては全面的な忠誠心を持っている。高氏らが採用しているのは、言語評価に用いられる方法論の一つではある。本論で設定されている評価項目から明らかになるのは、調査対象言語に対する評価ではなく、調査対象言語を話す人に対する評価であるように思われる。

そして、宮本（2007）は浙江省杭州市の大学生103名を対象に、8個の評価項目を設定し、浙江人大学生が普通話、上海語、江西語、湖南語、福建語、客家語、広東語、杭州語、寧波語、温州語、紹興語、揚州語、蘇州語、山東語、安徽語に対して持つイメ

ージのステレオタイプについて論じ、その結果として以下を挙げている。

(1) 全体的に見ると、杭州人以外の浙江人大学生の普通話と蘇州語に対する評価には類似点が見られる。共に「上品である」「親近感を覚える」「細やかである」「美しい」において高い評価を得ていることだ。逆に異なっているのは、実用的であるかそうでないかという点である。だが、杭州人以外の浙江人大学生は、実用的ではない蘇州語に対して、普通話に匹敵する程の高評価を下している。蘇州語が何故このように高い評価を得るのかについては、興味はあるが、本調査結果から原因を究明することはできない。(2) 杭州人以外の浙江人大学生と杭州人大学生の杭州語に対する評価を比較すると、杭州語を母語とする後の方が前者よりもかなり高く杭州語を評価している。(3) 杭州語以外の言語に対する評価では、杭州人以外の浙江人大学生と杭州人大学生との間に大きな差は見られなかった。(4) 上海語は杭州人以外の浙江人大学生と杭州人大学生によって低く評価されているが、この評価から両者が上海語は「柔らかである」というステレオタイプを持っていることをうかがい知ることができる。本論はこれまで進められてこなかった中国の方言に対する言語評価研究を一步前進させたという意味を持っている。但し、本論文とはデータを集計する際の手法が異なっている。

## (2) 普通話普及に関する研究

于（2005）では、2004年3月3日～4月2日放送分の中央電視台放送『新聞聯播』という番組に出演した498名の発言から普通話の普及度合いを分析している。その結果、発言者が日常生活を送る地域によって以下のような違いが得られたと指摘している。それによれば、表2を見れば分かる通り、北方方言区域において日常生活を送る発言者の普通話

表2 二大方言区における普通話のレベル比<sup>(4)</sup>

	北方方言区	北方区域内比率	南方方言区	南方区域内比率
1級	173	50.73%	23	14.65%
2級	121	35.48%	85	54.14%
3級	19	5.57%	37	23.57%
方言	28	8.21%	12	7.64%
合計	341	99.99%	157	100%

表3 地域社会の標準語化のプロセス (モデル)<sup>(6)</sup>

段階	標準語の使用パターン	標準語の社会的機能
前段階	(未使用)	—
第一(初期)段階	消極型	意思疎通のための共通語
第二(中期)段階	選択型	“他地域出身者との接触言語、公的言語”
第三(後期)段階	積極型	“高位の変種、地域における主流言語”
第四(完成)段階	完成型	唯一のコミュニケーションツール

レベルは、1級に属する者が50.73%と最も高く、2級に属する者が35.48%とそれに次いでいる。これに対し、南方方言区域において日常生活を送る発言者の普通話レベルは、2級に属する者が54.14%と最も高く、3級に属する者が23.57%とそれに次いでいる。1級に属する者は14.65%となっており、北方方言区域居住者のそれと比べると非常に低い数値を示していることが分かる。なお、発言者の普通話レベルについては、1997年に施行された『普通話水平測試等級標準』に基づいて于氏が判断を下している。1級に属する者の普通話が最もレベルが高く、2級、3級と等級が下がるにつれて、普通話のレベルは低下する。

また、陳(2005)では、著しい方言差を持つ中国における普通話普及の現状について考察している。陳氏は福州、広州、香港において625人を対象としてアンケート調査を実施し、それによって上記3地点における普通話及び方言の使用実態と標準語化のモデル化を試み、その結果、表3に示したように地域社会の標準語化モデルを提起した。更に、地域の経済地位への認識、地域に対する愛着度、及び当該地域の出身者としての誇りなどの意識が普通話の使用頻度に関与していることを証明した。<sup>(5)</sup>

## II 調査概要

### (1) 調査地点及び調査対象

北京市において実施した言語評価調査の調査実施地点と調査期間、調査対象及びその年齢構成については、以下の通りである。

・調査地点と場所：中華人民共和国北京市北京聯合大学及び首都師範大学

・調査実施期間：2006年10月10日～15日

表4 北京調査票内容1(自由記述式部分)

① 家では_____語を用いる。
② ショッピングの時には_____語を用いる。
③ 学校で同級生に対しては_____語を用いる。
④ 校外で同級生に対しては_____語を用いる。
⑤ 友達とお喋りをする時には_____語を用いる。
⑥ 授業中先生に対しては_____語を用いる。
⑦ 放課後先生に対しては_____語を用いる。

・調査対象：北京聯合大学 110名、首都師範大学 137名

・男女比：男性 35.2%、女性 64.8%

・年齢構成：18～30歳

本論文の内容は上記の調査範囲についてのみ言及するものであり、以降の文中では、本調査のインフォーマントを北京人大学生と称する。

### (2) 調査内容

調査には、自由記述式及び選択式の調査票を配布・回収する留置法を用い、自由記述式の部分では場面別言語使用状況、選択式の部分では言語評価の実態を調査した。

自由記述式の部分は、表4に示したとおり、①「家で」、②「ショッピング」、③「学校で同級生に対して」、④「校外で同級生に対して」、⑤「友達とお喋り」、⑥「授業中先生に対して」、⑦「放課後先生に対して」という7つの場面を設定した。

表4に示した調査票1(自由記述式部分)は、①～⑦まで設定した各場面において、普通話と母方言どちらを使用するかを回答させることによって、北京の大学生がどのように言語シフトを行っているかを探ることを狙いとされている。

また、選択式の部分——具体的な調査票の内容は宮本(2007)参照——については、(a) 高雅(上品である)、(b) 親切(親近感を覚える)、(c) 柔軟(柔らかである)、(d) 豪爽(豪快である)、(e) 細膩(細やかである)、(f) 実用(実用的である)、(g) 好聽(美しい)、(h) 酷(カッコいい)、(i) 喜歡(好きである)という9つの評価項目を設定し、それぞれの項目に①～⑤の選択肢を用意した。①を5点、②を4点、③を3点、④を2点、⑤を1点として集計している。故に、実際の言語評価数値において、3点以上の数値を示した場合はプラス、3点未満の

表5 北京人の言語使用状況

	場面① 家で		場面② ショッピング		場面③ 学校で同級生に対して		場面④ 校外で同級生に対して		場面⑤ 友達とお喋り		場面⑥ 授業中先生に対して		場面⑦ 放課後先生に対して	
普通話	163	66.0%	181	73.3%	174	70.4%	169	68.4%	166	67.2%	182	73.7%	175	70.9%
母方言	84	34.0%	66	26.7%	72	29.1%	76	30.8%	81	32.8%	64	25.9%	70	28.3%
両方	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.4%

数値を示した場合はマイナスのイメージとなる。

調査対象言語は、中国語の標準変種である普通話、十大方言から北京方言<sup>(7)</sup>、呉語<sup>(8)</sup>、徽語<sup>(9)</sup>、贛語<sup>(10)</sup>、湘語<sup>(11)</sup>、閩語<sup>(12)</sup>、粵語<sup>(13)</sup>——表中ではそれぞれ北京語、上海語、安徽語、江西語、湖南語、福建語、広東語の7つを共通項目として設定した。そして、その周辺地域の北方方言の局地方言である東北方言、延辺語(朝鮮族語)、丹東語、唐山語、大連語、天津語の6つを加えた。更に北方の人々が南方の局地方言についてどのような評価をするのかを調べることを目的に杭州語<sup>(14)</sup>、蘇州語の2つ、その他の北方の局地方言として山東語、西南官話と呼ばれ独自の地位を確立しつつある四川語の2つを設定した。

### Ⅲ 分析結果 1

本章では、表4で示した調査票1の内容に基づいて、北京人大学生の言語シフト状況を分析している。

普通話の使用率の高い順から並べると、場面⑥「授業中先生に対して」(73.7%) > 場面②「ショッピング」(73.3%) > 場面⑦「放課後先生に対して」(70.9%) > 場面③「学校で同級生に対して」(70.4%) > 場面④「校外で同級生に対して」(68.4%) > 場面⑤「友達とお喋り」(67.2%) > 場面①「家で」(66%) となる。つまり、普通話の使用率が最も高くなるのは場面⑥であり、逆に母方言——即ち北京語の使用率が最も高くなるのは場面①であることが分かる。

ただし、今日の北京人大学生が、どれほど明確に普通話と北京語を分けて考えているのか、という点に関しては注意しなければならない。そもそも、普通話は注(1)に示したように1956年2月に国務院が公布した『關於推廣普通話的指示』(普通話普及に関する指示)において、正式に「①北京語音を標準音とする、②北方方言を基礎方言とする、③典型

的な現代白話著作を文法規範とする」と規定されている。

では、同様に母方言が標準語選定の基盤となった東京での言語使用状況はどのようなのだろうか。ここでは、吉岡(1995)が論じている日本における東京都民の共通語と東京弁の言語シフトの例を取り上げておきたい。

「東京方言は、共通語にもっとも近似する方言である。その使い分けといっても、実際の言語行動では、語彙や表現のわずかな違いとしてしか現れてこないものであろう。実態はそうであっても、東京住民は方言と共通語の使い分けをし、場面によって、自分のことばづかいに気配りをすると意識しているのである。—(中略)—ことばの機能という面では、東京人も方言と共通語の境界を明瞭に意識していると見ることができよう。」<sup>(15)</sup>

吉岡氏は、東京都民が自分たちは場面に応じて明確に方言と共通語の言語シフトを行っていることを意識していると指摘している。また、吉岡氏は、緊張度が異なる3つの場面における東京住民の方言と共通語の使い分け意識についても分析しており、緊張度が高まるにつれて、共通語を使おうとする意識が高まる傾向にあるとも述べている。このような記述は筆者が本論文において北京人大学生の言語シフト状況を分析していくにあたって参考にすることができる。

では、もう一度、北京人大学生の言語使用状況に戻り、詳しく見ていきたいと思う。

表5を見れば分かる通り、北京人大学生の普通話の平均使用率は、70.1%となっており、場面②「ショッピング」、場面③「学校で同級生に対して」、場面⑥「授業中先生に対して」、場面⑦「放課後先生に対して」において平均値を上回っているが、その差は最大でも3.8%となっている。これは、彼らの各場面における普通話の使用率に大差がないことを物

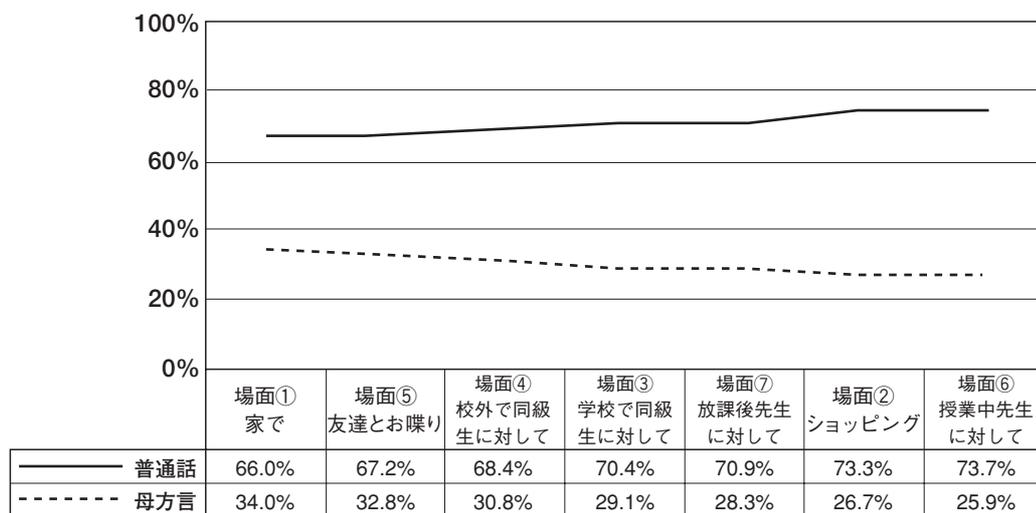
図1 北京人大学生の場面別コード切替状況<sup>(16)</sup>

表6 平均点化による各評価項目の序列（北京）

	高雅	親切	柔軟	豪爽	細膩	実用	好聴	酷	喜歡	総合
1	普通話 3.96	北京語 4.45	北京語 3.83	東北語 4.28	北京語 3.82	普通話 4.52	普通話 4.25	北京語 3.82	普通話 4.36	北京語 4.06
2	北京語 3.71	普通話 4.26	普通話 3.78	北京語 4.01	普通話 3.75	北京語 4.35	北京語 4.2	普通話 3.44	北京語 4.34	普通話 4.01
3	蘇州語 3.12	東北語 3.47	杭州語 3.32	普通話 3.73	蘇州語 3.32	東北語 3.27	天津語 3.06	東北語 3.27	東北語 3.23	東北語 3.07
4	杭州語 3.1	天津語 3.33	蘇州語 3.31	山東語 3.58	杭州語 3.3	天津語 3.12	延辺語 3.05	広東語 2.94	天津語 3.09	天津語 3.01
5	延辺語 3.06	唐山語 3.2	上海語 3.07	天津語 3.08	上海語 3.02	山東語 3.02	杭州語 3.02	天津語 2.93	延辺語 3	山東語 2.98
6	大連語 2.81	山東語 3.17	延辺語 3.05	大連語 3.07	延辺語 2.99	唐山語 2.9	東北語 3	延辺語 2.91	山東語 2.96	蘇州語 2.98
7	山東語 2.79	蘇州語 3.1	天津語 2.97	唐山語 3.04	四川語 2.97	広東語 2.86	蘇州語 2.97	山東語 2.86	杭州語 2.92	杭州語 2.98
8	広東語 2.78	延辺語 3.03	四川語 2.96	延辺語 2.85	湖南語 2.94	大連語 2.86	山東語 2.94	杭州語 2.74	蘇州語 2.9	延辺語 2.97
9	丹東語 2.78	杭州語 3.02	湖南語 2.94	四川語 2.84	天津語 2.9	四川語 2.81	広東語 2.93	唐山語 2.72	広東語 2.88	唐山語 2.89
10	安徽語 2.76	大連語 2.93	福建語 2.92	丹東語 2.83	唐山語 2.89	蘇州語 2.8	唐山語 2.91	蘇州語 2.71	唐山語 2.86	広東語 2.85
11	江西語 2.75	四川語 2.93	江西語 2.84	安徽語 2.76	広東語 2.88	延辺語 2.77	福建語 2.78	四川語 2.71	大連語 2.76	大連語 2.83
12	湖南語 2.7	湖南語 2.83	安徽語 2.84	江西語 2.73	福建語 2.86	杭州語 2.74	四川語 2.78	江西語 2.67	四川語 2.72	四川語 2.82
13	唐山語 2.67	広東語 2.83	広東語 2.82	広東語 2.7	安徽語 2.85	丹東語 2.73	湖南語 2.75	大連語 2.67	湖南語 2.71	湖南語 2.75
14	天津語 2.64	丹東語 2.77	大連語 2.79	湖南語 2.66	大連語 2.81	安徽語 2.69	大連語 2.75	丹東語 2.66	安徽語 2.67	安徽語 2.74
15	福建語 2.63	安徽語 2.77	唐山語 2.78	杭州語 2.65	山東語 2.81	江西語 2.66	江西語 2.7	安徽語 2.64	福建語 2.66	丹東語 2.73
16	四川語 2.63	江西語 2.72	丹東語 2.73	蘇州語 2.62	江西語 2.8	福建語 2.62	安徽語 2.67	福建語 2.63	丹東語 2.66	江西語 2.72
17	上海語 2.51	福建語 2.63	山東語 2.71	福建語 2.56	丹東語 2.74	湖南語 2.61	丹東語 2.65	湖南語 2.62	江西語 2.61	福建語 2.7
18	東北語 2.45	上海語 2.46	東北語 2.28	上海語 2.09	東北語 2.41	上海語 2.33	上海語 2.34	上海語 2.28	上海語 2.19	上海語 2.48

語っている。

調査によって明らかになった北京人大学生の場面別言語シフトの実態をグラフ化すると図1のようになる。

上記した図1の各場面における普通話及び母方言の使用比率を合わせて比較すると、各場面の言語使用率に大きな差は見られないものの、場面のフォーマル性が強ければ強いほど、普通話の使用率は上昇、母方言の使用率は低下し、逆に、場面のフォーマル性が弱ければ、それに応じて、普通話の使用率は低下、母方言の使用率は上昇していることが分かる。このことから、インフォーマントは言語を使う場面のフォーマル性によって言語を選択していると考えられる。ただし、北京人大学生の普通話使用率には、

目立った凹凸が見られず、緊張度が最も低くなる場面①における普通話使用率ですら66.0%と非常に高くなっていることから、北京人大学生の中では、普通話の母語化が進んでいると見ることもできるのではないだろうか。

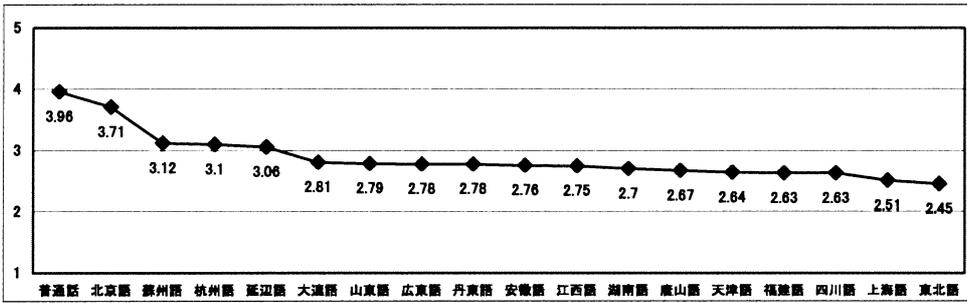
## IV 分析結果2

### (1) 全体像

表6は、各評価項目における各方言の序列を示したものである。

中国において共通語としての役割を果たす普通話には、「上品である」「実用的である」「美しい」「好き

図2 上品である（北京）



である」において1位、「親近感を感じる」「柔らかである」「細やかである」「カッコいい」において2位、「豪快である」において3位という平均的に高い評価順位を示している。

北京人大学生の母方言である北京語は、「親近感を感じる」「柔らかである」「細やかである」「カッコいい」において1位、「上品である」「豪快である」「実用的である」「美しい」「好きである」において2位となっており、「豪快である」で東北語が1位となっている他は、全ての評価項目において、普通話と北京語が1位、2位を占めている。

北京人大学生の蘇州語及び杭州語に対する評価は、「上品である」（蘇州語：3位、杭州語：4位）、「親近感を感じる」（蘇州語：7位、杭州語：9位）、「柔らかである」（蘇州語：4位、杭州語：3位）、「豪快である」（蘇州語：16位、杭州語：15位）、「細やかである」（蘇州語：3位、杭州語：4位）、「実用的である」（蘇州語：10位、杭州語：12位）、「美しい」（蘇州語：7位、杭州語：5位）、「カッコいい」（蘇州語：10位、杭州語：8位）、「好きである」（蘇州語：8位、杭州語：7位）というように非常に類似している。

蘇州語及び杭州語と同様に呉語に属する上海語に対する評価は、「柔らかである」及び「細やかである」で共に5位となっている他は、全ての評価項目において「上品である」（17位）、「親近感を感じる」（18位）、「豪快である」（18位）、「実用的である」（18位）、「美しい」（18位）、「カッコいい」（18位）、「好きである」（18位）という低い評価順位となっている。この結果から見る限り、北京人大学生は上海語についてあまり良い印象を持っていないように見受けられる。これには、こういった要素が影響を

及ぼしているのだろうか。

東北語は、「豪快である」において1位、「親近感を感じる」「実用的である」「カッコいい」において3位、「美しい」において6位、「上品である」「柔らかである」「細やかである」においては18位となっており、普通話とは全く異なったイメージを持たれていることが分かる。

山東語に対する評価は、「豪快である」において4位、「実用的である」において5位、「親近感を感じる」において6位、「上品である」「カッコいい」において7位、「美しい」において8位、「細やかである」において15位、「柔らかである」において17位となっている。

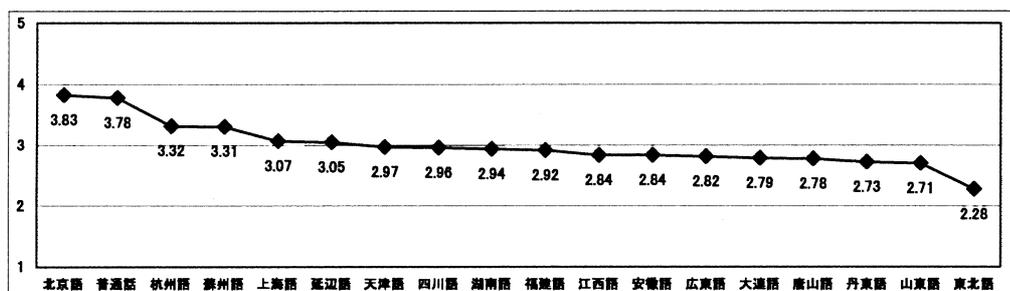
膠遼官話に属する大連語と丹東語はそれぞれ以下のような評価を下されている。「上品である」（大連語：6位、丹東語9位）、「親近感を感じる」（大連語：10位、丹東語：14位）、「柔らかである」（大連語：14位、丹東語：16位）、「豪快である」（大連語：6位、丹東語：10位）、「細やかである」（大連語：14位、丹東語：17位）、「実用的である」（大連語：8位、丹東語：13位）、「美しい」（大連語：14位、丹東語：17位）、「カッコいい」（大連語：13位、丹東語：14位）、「好きである」（大連語：11位、丹東語：16位）と多少の差はあるものの、評価傾向は類似しているように見受けられる。

## (2) 高雅（上品である）

図2は、北京人大学生が評価項目「上品である」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。

最も評価ポイントが高いのは、普通話（3.96pt）で北京語（3.71pt）がそれに次ぐ。その他で、プラ

図3 柔らかである (北京)



ス評価を得ているのは、蘇州語 (3.12pt)、杭州語 (3.1pt)、延辺語 (3.06pt) のみである。2位の北京語と3位の蘇州語との間に大きな差が存在している。上記した5つの言語以外は、全てマイナス評価をされている。なかでも特に低いのが、東北語 (2.45pt)、上海語 (2.51pt)、四川語 (2.63pt) である。

東北語は後述する「豪快である」において、比較的高い評価を得ている。そのため、「豪快である」という評価項目が持つイメージとはほぼ正反対のものである洗練され、美しいといった含意のある「上品である」においては、評価が低くなったものと考えられる。東北語と同様に後述する「豪快である」において高い評価を得ている山東語については、本評価項目において、7位と比較的上位に位置しているながらも、マイナスの評価数値を示している。北方と南方では風土や生活習慣が異なっている。こうした違いが言語に対するイメージにも影響を及ぼしている可能性を指摘することができる。だが、具体的に東北地方や山東省のどのような側面が東北語及び山東語のイメージを構築したのかについては、興味はあるが、本研究の範囲では追求することはできない。

本評価項目において蘇州語、杭州語に対する評価は、普通話及び北京語に比べてやや低くなっているものの、それぞれ3位、4位と比較的高いものである。これには蘇州語及び杭州語が持つ歴史的あるいは文化的な背景が多大な影響を及ぼしている可能性が高い。このことから、本評価項目においては、強い文化的威信を有する言語が高く評価される傾向にあると言えるのではないだろうか。

例えば、本評価項目における上海語に対する評価

は、東北語に次ぐ低さとなっている。上海語の母語集団である上海市は、今でこそ中国最大の国際化大都市として日々発展を続けているが、150年前は辺鄙な漁村に過ぎなかった。北京人大学生が上海語に対してこれほど低い評価を下す一つの要因として、上海語の母集団である上海は文化的及び歴史的背景を持たないという点を指摘することができるのではないだろうか。

### (3) 柔軟 (柔らかである)

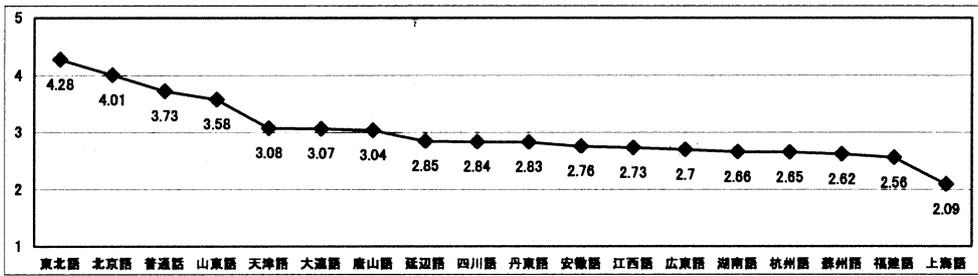
図3は、北京人大学生が評価項目「柔らかである」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。ここでは、2位の普通話と3位の杭州語の間、4位の蘇州語と5位の上海語の間、17位の山東語と18位の東北語の間に明らかな差が認められる。

本評価項目においてもやはり北京語 (3.83pt)、普通話 (3.78pt) に対する評価は非常に高い。上記2方言に加え、上海語 (3.07pt)、蘇州語 (3.31pt)、杭州語 (3.32pt)、延辺語 (3.05pt) の4方言もプラスの評価数値を示している。このうち、北京人大学生にとって母方言である北京語とその北京語を基礎とする共通語であり、北京語との境界があやふやになりつつある普通話に対する突出した評価を除外すると、プラス評価を得ている方言の大半が呉語によって占められている。

典型的な呉語である蘇州語については曹 (1987) に次のような一節がある。

「蘇州語においては、若い女性の方が若い男性に比べて、よりts系と狭母音を結合させた発音を好む傾向にあるため、こういった発音が本当に女性的な特徴であるように思われる」<sup>(17)</sup>

図4 豪快である(北京)



また、呉(2006)は、伝統的な蘇州昆劇に関する記述の中で、「蘇州語の口腔の振幅は小さく、尖団音が多いことから、非常に柔らかである。また、口の開きが普通話より小さく、発音もより軽いため、特に女性を表現するのに適している<sup>(18)</sup>」と述べている。

こういった記述から蘇州語は女性的な言語であるといったイメージを構築されやすいことが分かるのではないだろうか。中国国内には各方言に対する言語評価を扱った学術的な研究は管見する範囲では見られないため、これを実証することは難しいが、易(2006)は中国の各都市を主観的に男性的なものや女性的なものに分類しており、それによれば、蘇州語を始めとする呉語は女性的な都市を母集団に持っている。

その一方、上記6方言以外は全てマイナスだが、マイナス評価を下されている方言には、東北語、唐山語、大連語、天津語、山東語と北方に位置する方言が多く、中でも東北語(2.28pt)に対する評価数値の低さは突出している。

次節の「豪快である」とはちょうど正反対の結果となっている。

#### (4) 豪爽(豪快である)

図4は、北京人大学生が評価項目「豪快である」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。本評価項目においては、4.28ptという突出した評価ポイントの高さを示す東北語が1位である。ここでは4位の山東語と5位の天津語の間、17位の福建語と18位の上海語の間に明らかな差が認められる。

前節「柔らかである」における評価とは異なり、東北語、唐山語、大連語、天津語、山東語といった北方に位置する方言が多くプラス評価を得ている。

なかでも東北語に対する評価は4.28ptと、インフォーマントにとっての母方言である北京語に対する評価を大きく上回っている。インフォーマントが普通話及び北京語より他の方言を高く評価しているのは、「豪快である」における東北語に対する評価のみである。また、本評価項目において高い評価を得ている方言の大半が、易(2006)において男性的であるという評価を受けた都市を母集団として持っている。

これとは対照的に、前小節においてプラス評価を得ていた上海語、杭州語、蘇州語は等しくマイナス評価を下されている。呉語の局地方言に対する評価は軒並み低くなっている。延辺語は、北方の言語ではあるが、少数民族である朝鮮族の言語であるため、他の北方方言とはイメージのステレオタイプがいささか異なるものと考えられる。

ただし、普通話及び北京語に関しては、2つの対照的な概念であるはずの前小節「柔らかである」においても、本小節「豪快である」においても同程度のプラス評価を得ている。

#### (5) 実用(実用的である)

図5は、北京人大学生が評価項目「実用的である」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。本評価項目では、普通話(4.52pt)、北京語(4.35pt)、東北語(3.27pt)、天津語(3.12pt)、山東語(3.02pt)がプラスの評価数値を示している。7位の広東語を除くと、上位を占めているのは全て官話に属する方言である。ここでは2位の北京語と3位の東北語の間、17位の湖南語と18位の上海語の間に明らかな差が認められる。

普通話は、中国において共通語としての役割を担う言語であり、その普及は56もの民族が共存する

図5 実用的である (北京)

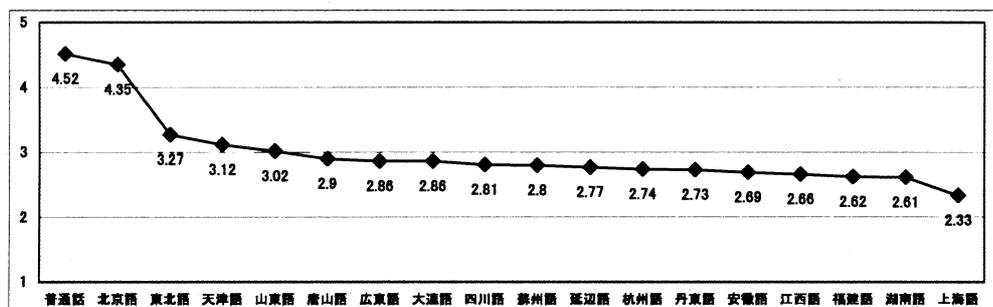
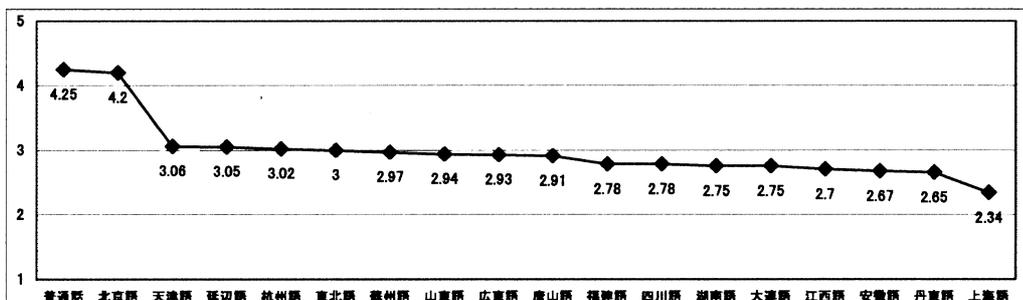


図6 美しい (北京)



中国において、人々が交流する上での言語的障害の克服を助け、社会的交流を促進させ、政治・経済・文化の構築と科学技術発展の上で、非常に重要な意味を持っている。そのため、中国政府は建国以来、普通話の普及を強力に推し進めてきた。

中国政府が普通話を普及するために発布した法律・法規には以下のようなものがある。『中華人民共和国憲法』(1982)第19条：「国家は全国共通の普通話を普及させる」、『国家通用言語文字法』(2000)第3条：「国家は普通話と規範漢字を普及する」、同第4条：「国民は国家通用言語文字を学習し、使用する権利を有する。国家は国民が国家通用言語文字を学習し、使用する場を提供する。地方政府およびその関連部門は普通話と規範漢字を普及させる措置を採らなければならない」、同第5条：「共通言語文字の使用は国家主権と民族の尊厳を保ち、国家統一と民族が結束し、社会主義物質文明と精神文明を築く助けとなる」では、普通話を中国における共通語として定め、国民がそれを使用し、学習する権利を有することを説いている。

また、『幼稚園管理条例』(1989)第15条：「幼稚園では普通話を用いるものとする」、『義務教育法実施詳細』(1992)第24条：「義務教育を実施する学校は教育と各種活動の中で、普通話の使用を普及するものとする。師範学院の教育と各種活動の中で

は、普通話を使用するものとする」、『教育法』(1995)第12条：「学校及びその他の教育機関が行う教育は、全国共通の普通話と規範文字の使用を普及するものとする」、『国家通用言語文字法』(2000)第10条：「学校及びその他の教育機関は普通話と規範文字を基本的な教育に用いる言語文字とする」、同第18条：「国家通用言文字は『漢語ピンイン法案』を注音の手段とする。初等教育では漢語ピンイン教育を行うものとする」、同第20条：「対外漢語教育は普通話と規範漢字の教育を旨とする」、『非識字者一掃条例』第6条：「非識字者一掃教育は普通話を用いるものとする」においては、各種教育機関における普通話の使用を普及することを強く推し進めている。

本評価項目における普通話に対する高い評価には、こういった言語政策によってもたらされた実用性と本調査のインフォーマントが小学校、中学校、高校、大学において受けてきた普通話教育が強く影響しているのではないかと筆者は考える。

## (6) 好聴 (美しい)

図6は、北京人大学生が評価項目「美しい」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。

普通話 (4.25pt)、北京語 (4.2pt)、天津語

(3.06pt)、延辺語 (3.05pt)、杭州語 (3.02pt) がプラスの評価数値を示している。また、2位の北京語と3位の天津語の間、17位の丹東語と18位の上海語の間に明らかな差が認められる。

本評価項目においては、極めて規範的な言語である普通話に対する評価が最も高く、その基礎方言にあたる北京語に対する評価もそれに次ぐ高さとなっている。もちろん、ここでも北京人大学生が普通話と北京語を混同している可能性を否定することはできない。

また、『国家通用言語文字法』(2000) 第19条によって、「ラジオやテレビのアナウンサー、そして映画俳優、教師、国会公務員の普通話レベルは、国の規定する基準に達していなければならない」ということが規定されており、各地において各種メディアが放送する普通話が非常に規範的で美しいものだという意識が芽生え始め、その意識が言語評価に影響を与えたのではないかと推測される。

そして、蘇州語、杭州語に関しては、高い評価を得ている要因として、歴史的背景や心理的要因の影響を指摘することができる。この2方言の母語集団である蘇州市、杭州市は、時期や規模こそ違えども、一国の都として文化的及び経済的にも非常に発展した都市である。こうした都市イメージが北京人大学生の中にも根付いており、蘇州語及び杭州語に対する高い評価に繋がった可能性がある。

また、南宋の憂国詞人辛棄疾の詞には蘇州語について次のような一節がある。

「醉里呉音相媚好、白髮誰家翁媪。」

上記のことから、南宋時代には既に蘇州語は「媚好」——つまり美しく、艶めかしい言語であったというイメージを持つ者がいたことが分かる。

さらに、曹 (1987) は、北京の若い女性の間で見られるいわゆる「女国音」が現れた原因としていくつかの可能性を述べており、その中で、以下のように蘇州・上海方言の影響を示唆している。

「南方方言において尖団音を区別するのは普遍的な現象であり、蘇州、上海方言は20、30年代には尖団音を区別していた。老年層は現在でも区別しており、尖音をts系で、団音tɕ系で発音する。北京人

と上海人の接触は頻繁で、ある方面では、北京人は上海を尊ぶ心理を持っている。そのため言語上で上海方言の特徴を受け入れた可能性もある。<sup>(19)</sup>」

さらに「北京人にとってこういった発音は、『垢抜けていて、美しい』と受け取られる」とも述べている。こういった北京人が呉語中に見られる尖団音の分化現象に対して持つイメージが北京人大学生の呉語に対するイメージを構築した可能性があるとして筆者は考える。

## (7) 酷 (かっこいい)

図7は、北京人大学生が評価項目「かっこいい」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。本評価項目においては、北京語 (3.82pt)、普通話 (3.44pt)、東北語 (3.27pt) が、プラスの評価数値を示している。ここでは1位の北京語と2位の普通話の間、3位の東北語と4位の広東語の間、17位の湖南語と18位の上海語の間に明らかな差が認められる。

北京人大学生は、極めて規範的な言語である普通話についてもかっこいいと評価している。北京人大学生は、母語である北京語を最もかっこいいと評価していることから、北京語をその基礎方言とする普通話に対する評価も高まったと考えられる。

上位7位を見ると、先に示したプラスの評価数値を示す3方言に、マイナスの評価数値とはなっていないものの、順位は比較的高い広東語 (2.94pt)、天津語 (2.93pt)、延辺語 (2.91pt)、山東語 (2.86pt) が加わる。この7方言のうち、北京語、普通話、東北語、天津語、山東語の5つに関しては、(4)「豪快である」においてもプラスの評価数値を示している。このことから、「かっこいい」=「豪快である」という単純な図式が成立するわけではないが、本評価項目と「豪快である」との間には密接な関係が存在している可能性を指摘することができる。

## (8) 喜歡 (好きである)

図8は、北京人大学生が評価項目「好きである」において示した、彼らの心中に存在する各方言の序列である。本評価項目においては、普通話 (4.36pt)、

図7 カッコいい (北京)

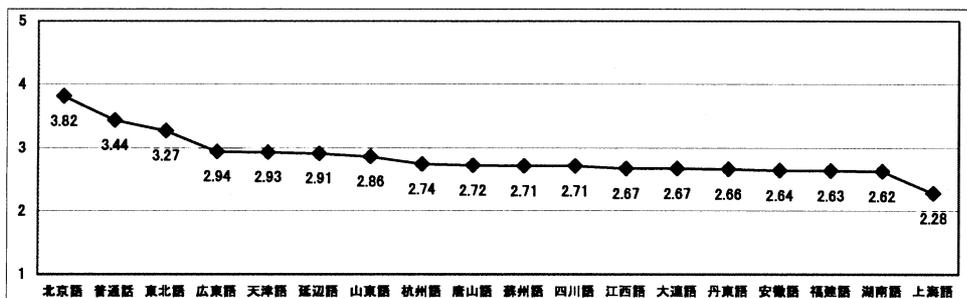
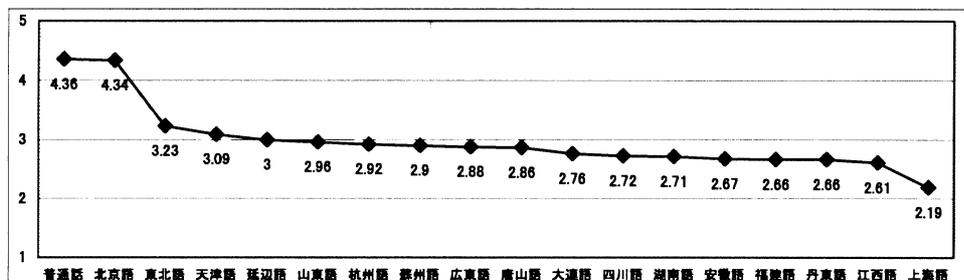


図8 好きである (北京)



北京語 (4.34pt)、東北語 (3.23pt)、天津語 (3.09pt) がプラスの評価数値を示している。ここでは、2位の北京語と3位東北語の間、17位の江西語と18位の上海語の間に明らかな差が認められる。

北京語は北京人大学生にとっては母方言であるため、本評価項目において非常に高い評価を得ているのは当然のことであるといえるだろう。また、東北語及び天津語に関しては、北京人大学生の母方言である北京語と同じく北方方言に属し、また北京との地理的距離も近い。

また、本評価項目において、著しく低い評価数値を示しているのは、最下位に位置する上海語である。上海市は調査地点である北京市との直線距離1100kmの地点に位置する直轄市である。しかし、本調査において対象言語として設定した方言の中には、調査地域とその母語集団との間の直線距離がさらに遠いものも数多く含まれている。それに関わらず、北京人大学生の上海語に対する評価は最も低い数値を示している。これに影響を与えた要素として、北京人大学生の父母や周囲の人々が囁く「上海人は嫌いだ」という心理的要素や北京と上海の間に存在するライバル関係といったいくつかの可能性を示唆することができる。だが、実際にはどうして北京人大学生はこれほど上海語を嫌うのかということについては、興味はあるが、本調査結果の範囲では

追求することはできない。

### (9) 北京語及び上海語に対する評価

これまでは、評価項目ごとに分析を行ってきたが、本節では方言ごとの分析を試みたい。本研究では元来、普通話、北京語、上海語、安徽語、江西語、湖南語、福建語、広東語、東北語、延辺語、丹東語、唐山語、大連語、天津語、杭州語、蘇州語、山東語、天津語という18の方言を評価対象としている。だが、紙幅の関係上、本節では特に北京人大学生の北京語と上海語に対する評価を抽出し、分析したいと思う。

北京人大学生の心中に存在する北京語に対するステレオタイプの評価は、図9のようになる。普通話と共に、本調査で設定した調査対象言語のうち、全評価項目においてプラスの評価数値を示す言語の一つである。北京人大学生は、自らの母方言である北京語を非常に高く評価している。しかし、わずかではあるが、「豪快である」における評価は高く、「柔らかである」及び「細やかである」における評価は低いという多数の北方方言が有する特徴が見られる。

北京語は北京人大学生の母方言であるため、「親近感を覚える」が最も高く評価されているのは当然のことであり、北京人大学生の心理的要素の表れで

図9 北京語に対する評価

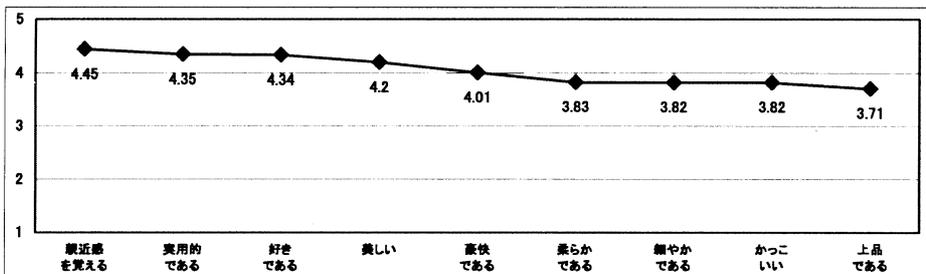
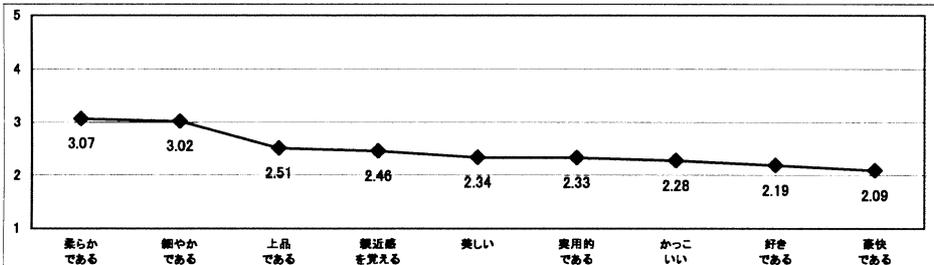


図10 上海語に対する評価



あると言えよう。また筆者の考察によると、「実用的である」における評価を普通話に対するものと比較すると、その意味合いが異なるように思われる。普通話における実用性の高さは、全国的に急速に普及しつつある共通語としてのフォーマルな実用的威信に裏打ちされたものであるのに対し、北京語における実用性の高さは、北京語を母方言とする北京人大学生が日常生活の各場面で使用する言語としてのインフォーマルな実用的威信に裏打ちされたものなのではないだろうか。

また、北京人学生が普通話と北京語を混同している可能性を考慮して、普通話に対する評価と北京語に対する評価を比較すると、多少ではあるが、いくつかの相違点が見られる。まず、普通話に対する評価では、「実用的である」が最も高い評価であったが、これに対し北京語に対する評価では、「親近感を覚える」が最も高い評価となっている。次に、普通話に対する評価においては低かった「豪快である」が北京語に対する評価では比較的上位に位置している。

図9から、北京人大学生の北京語に対するイメージは、「強い親近感を覚え、実用的であり、好ましいが、カッコよさや上品さは弱い」というものであり、実用的であり好ましいと認識される点は普通話に対するものと共通しているが、普通話が持つ上品さというイメージはいささか弱いようである。

北京人大学生の心中に存在する上海語に対するステレオタイプ的な評価は、図10のようになる。北京人大学生の上海語に対する評価は非常に低い。

北京人大学生の上海語に対する評価は、「柔らかである」及び「細やかである」においてはプラス評価を得ているものの、その他の評価項目においては、全てマイナス評価を下されている。図10から読み取れる北京人大学生の上海語に対するイメージは、「柔らかさや細やかさは感じるが、カッコよさや豪快さを持たず好ましくない」というものであり、後述する蘇州語及び杭州語に対する評価と非常に類似している。故に、この3つの方言に見られる評価数値を北京人大学生が呉語に対して持つ評価のステレオタイプということができないのではないだろうか。

一般的に、言語に対する評価には、その言語の母集団の経済的地位が強関わりしてくると思われるが、そこだけを見れば、中国随一の経済的地位を誇る上海に対する評価は最も高くなるはずである。しかし、結果は図10の通りである。

しかし、上海語に対して「柔らかである」及び「細やかである」においては高く、「豪快である」においては特に低く評価していることから、上海語が持つ呉語としての特徴に関しては、ある程度の認識あるいは理解を持っていると見受けられる。

図10に見られる北京人大学生の上海語に対する低い評価は、楊（2006）が論じる北京人の上海人に

対する評価に通じるものがあると思われる。以下にその文を引用する。

「北京人は上海人に対して多くの感情を持っている。ほぼ全ての北京人が上海人の印象を延々と語ることができる。だが、もちろん良い評価は少ない。特に北京の女性は上海の男性を糾弾することに熱中する。しかも、皆があたかも深い恨みを持っているかのように口をそろえて罵る。もちろん上海にも北方人を軽蔑する傾向はある。例えば、北方人を『北佬』（北のヤツ）と称するが、一般的に北京人だけはこの手の蔑称の外に置かれる。しかし、北京には南方人に対する共通の蔑称はない。彼らが上海人に対して、『彼は上海人だ』と言う際には、その口調に軽蔑の意が含まれる<sup>(20)</sup>」。

このように図10は、北京人大学生が上海語に対してマイナスのイメージを持っていることを指摘する資料の一部として提示することはできる。だが、この北京人大学生の上海語に対する評価の低さについては、今後の課題とし、本論文ではいくつかの可能性を示唆するに留める。

## まとめ

(1) 本調査によって明らかになった北京人大学生の普通話使用状況は次の順に低くなる。授業中先生に対して>ショッピング>放課後先生に対して>学校で同級生に対して>校外で同級生に対して>友達とお喋り>家で。場面の緊張度、すなわちフォーマル度が高まる程、普通話の使用が増加する傾向にある。

(2) ただし、北京人大学生の普通話使用率には、目立った凹凸が見られず、緊張度が最も下がる場面①における普通話使用率ですら66%と非常に高くな

っていることから、北京人大学生の中では、普通話の母語化が進んでいると見ることもできるのではないだろうか。

(3) 北京人大学生の母方言である北京語に対する評価は普通話に対するものと並ぶほどの高さを示しており、それによって北京人大学生が母方言に対して強いアイデンティティを有していることがうかがえるのではないだろうか。

(4) 北京人大学生は北方方言に属する方言に対して、「豪快さは感じるが、柔らかさや細やかさは感じられない」というステレオタイプを持っていることをうかがい知ることができる。

(5) 北京人大学生は呉語に属する方言に対して、「柔らかく、細やかで上品さも感じるが、豪快さや、かっこよさは感じられない」というステレオタイプを持っていることをうかがい知ることができる。

本論文によって、北京人大学生が日常生活において普通話と母方言をどのようにシフトしているのか、そして、普通話や母方言、その他の方言に対してどのようなイメージを持っているのかを垣間見ることができた。ただし、次のような問題点も見られる。(1) インフォーマントの男女比が均等でないことから、男性と女性によって方言イメージに差が生じるのかを明らかにすることができない。(2) また、年齢層が18～30歳に限られているため、年齢層によって方言イメージに差が生じるのかを明らかにすることができない。これらの問題の克服は、今後の課題としたい。

(みやもと・だいすけ)

## 【附記】

本研究は科研費（18・53232）の助成を受けたものである。

【注】

- (1) 普通話：1956年2月に国務院が公布した『關於推廣普通話的指示』において、正式に以下のように規定された。「①北京語音を標準音とする、②北方方言を基礎方言とする、③典型的な現代白話著作を文法規範とする。」(漢語大詞典 1990 :5-777)
- (2) 井上 2007 : 33
- (3) 陳 1990 : 46
- (4) 于 2005 : 153
- (5) 陳 2005 : 154
- (6) 陳 2005 : 157
- (7) 漢語十大方言の中で最も広い分布域と、最も多い使用人口を有する官話方言に属し、主に北京市および新疆石河などにおいて用いられる。使用人口は約2000万人に達する。(蔡、郭 2001 : 95)
- (8) 主に浙江省、江蘇省南部および上海市において用いられる。この他、江西省皖皖南および福建省浦城北部にも呉方言の一部が見られる。呉方言の使用人口は約7500万人に達する。(蔡、郭 2001 : 285-286)
- (9) 主に安徽省南部新安江流域の旧徽州府において用いられる。この他、安徽省、浙江省北部、江西省の16の県市に分布する。使用人口は約350万人に達する。(蔡、郭 2001 : 137)
- (10) 主に江西省の贛江中、下流、撫江流域および鄱陽湖地域において用いられる。使用人口は約3500万人に達する。(蔡、郭 2001 : 82)
- (11) 主に湖南省において用いられ、江西省全州、資源等の一部の県市にも分布する。湘方言の使用人口は約3200万人に達する。(蔡・郭 2001 : 296)
- (12) 主に福建、台湾、海南の3省および広東省潮汕地域の12県市において用いられる。使用人口はおよそ4000万人に達する。閩方言はその下位方言として、閩北語と閩南語があるが、この二つは相互にコミュニケーションをとることはできない。(蔡、郭 2001 : 195)
- (13) 主に広東省珠江デルタ、広東省西部、広西チワン族自治区東南部において用いられる。使用人口は約4500万人に達する。(蔡、郭 2001 : 195)
- (14) 臨安府時代に杭州語は多分に官話の影響を受けたため、半官話として一般的な呉方言とは区別され、ある種の方言島を形成している。例えば、杭州語は語尾の「儿」が非常に発達しており、人称代名詞には、「儂(あなた)」、「伊(彼)」といった伝統的な呉語タイプが用いられず、全て北方方言の「我(私)」、「你(あなた)」、「他(彼)」を用いている。これはみな杭州語が北方官話の方向へ近づきつつあることの明証である。(詹 1983 : 143)
- (15) 吉岡 1995 : 59
- (16) 各場面における言語使用率の和が100%とならないのは、それぞれの場面において普通話と方言の「両方」を用いると回答したインフォーマントのパーセント・ポイントを抜いたためである。
- (17) 曹 1987 : 88より訳出。
- (18) 呉 2006 : 225-226より訳出。
- (19) 曹 1987 : 88より訳出。
- (20) 楊 2006 : 309より訳出。

【参考文献】

井上史雄

2007 『変わる方言、動く標準語』 東京：筑摩書房

易中天

1997 『読城記』(修訂本) 上海：上海文芸出版社

於根元

2005 『新时期推广普通话方略研究』 北京：中国经济出版社

金田一京助等

1989 『新明解国語辞典 第4版』 東京：三省堂書店

高一虹・蘇新春・周雷

1998 「回帰前香港、北京、広州大学生的語言態度」『外語教学与研究』第2期、434-448

蔡富有・郭龍生

2001 『語言文字学常用辞典』 北京：北京教育出版社

伯慧

詹 1983 『現代漢語方言』(樋口靖訳) 東京：光生館

曹耘

1986 「北京話語音里的性別差異」『漢語學習』1986年第6期、31

1987 「北京話 組声母的前化現象」『語言教学与研究』1987年第3期、84-91

大東文化大学中国語大辞典編纂室編

- 1994 『中国語大辞典』 東京：角川書店
- 陳松岑  
1990 「紹興市城区普通話的社会分布及其發展趨勢」『語文建設』1990年第1期、41-47
- 宮本大輔  
2007 「中国における言語評価—浙江省の大学生を例にして—」神奈川大学21世紀COE年報『人類文化研究のための非文字資料の体系化』4、193-202
- 楊東平  
2006 『城市季風—北京和上海的文化精神』（修訂本）北京：新星出版
- 吉岡泰夫  
1995 「首都方言の威光と言語意識・言語変化」言語編集部編『変容する日本の方言』東京：大修館書店